

しものべさか

下延坂遺跡(範囲確認調査)

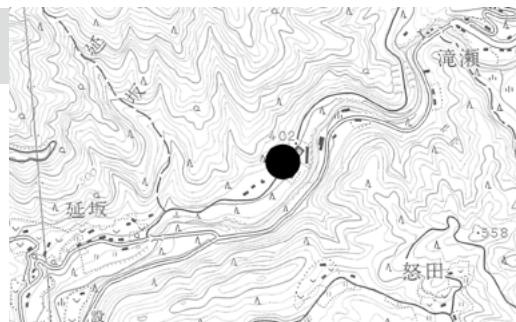
所在地 北設楽郡設楽町川向字下延坂、上延坂
(北緯35度6分58秒 東経137度34分28秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成28年6月～8月

調査面積 828㎡

担当者 酒井俊彦・蔭山誠一



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事関連の事前調査として、国土交通省から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。下延坂遺跡は縄文時代と弥生時代、平安時代末～鎌倉時代の遺物散布地として周知の遺跡である。今回の範囲確認調査は、遺跡の北側にある調査対象範囲内に平面1m×2mの試掘トレンチを59ヶ所、2m×2mの試掘トレンチを1ヶ所、2m×3mの試掘トレンチを3ヶ所、2m×5mの試掘トレンチを2ヶ所、3m×3mの試掘トレンチを1ヶ所、3m×5mの試掘トレンチを6ヶ所、3m×8mの試掘トレンチを9ヶ所、4m×8mの試掘トレンチを1ヶ所、3m×15mの試掘トレンチを6ヶ所、3m×17mの試掘トレンチを1ヶ所の計89ヶ所を設定した。そして遺構と遺物の有無を地表面から順にバックホウや人力により掘り下げて確認し、遺構面(地山面)の遺構・遺物と地層の堆積状況を確認した。調査面積は828㎡である。

立地と環境 下延坂遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地する。なお、かつては稲武方面から田口方面にいたる街道と田口方面から津具方面にむかう伊那街道に結ぶ間道が遺跡を通る。

調査の概要 調査は、遺跡の中央を北東から南西に走る林道の東側にあるTT001～TT019・TT021・TT022から始めた。遺跡のこの部分は近年まで建物が存在し、地表面の造成があったが、TT001～TT005・TT007～TT009・TT011～TT015・TT021・TT022において、地表面から0.1m～0.5m前後の深さで、遺構面や地山面が確認でき、TT002～TT005・TT009・TT011・TT012・TT015では縄文土器・古代の土師器の甕・灰釉陶器の碗・山皿・安山岩と凝灰岩剥片などが出土し、土坑などの遺構も多く検出できた。TT006・TT010・TT016～TT019では、地表面下に整地・盛土層が厚くあり、TT010で山皿、TT019で安山岩剥片を確認したが、その他のトレンチでは出土遺物もなく、遺構面・地山面を確認できなかった。

林道の西側で、遺跡の北側にあるTT020・TT023～TT039では、山側のTT020・TT023～TT025・TT028～TT030・TT036～TT039では整地・盛土層が深い地点が多いが、TT026・TT027・TT038・TT039では、土器片とともに土坑が少数認められ、遺跡の北西端部にあたるものと思われる。またTT034・TT035では宅地による造成により遺構面が残っておらず、山斜面にあるTT031～TT033では、中世以前の遺構・遺物を確認できなかった。

林道の西側で遺跡の北側にあるTT040～TT067・TT069～TT072では、地表面下に宅地や耕作地の造成に伴う整地・盛土層が深い地点が多いが、遺構面・地山面において土坑や溝などの遺構が確認できるトレンチが多く、TT040・TT048では弥生時代中期の土器片が多数見つかり、付近に弥生時代中期の遺跡がひろがる可能性が高い。またTT042・TT047・TT048・TT049・TT051・TT054・TT069・TT070などでは、縄文土器などの土器片が出土し、TT051より南東側の扇状地形のひろがる地点では、遺跡が展開する可能性がある。一方、

TT052～TT062のある遺跡の西隅部では、明確な遺構が確認できなかった。

林道の南東側にあるTT068・TT073～TT089では、表土を掘削すると、遺構面や地山面が確認でき、多くのトレンチで土坑などの遺構が検出できた。その中で、TT068・TT073・TT077・TT078・TT080・TT083・TT085・TT086・TT088・TT089では、縄文土器・灰釉陶器・安山岩剥片・凝灰岩剥片・黒曜石剥片などが出土した。出土遺物から縄文時代後期頃の遺跡が展開する可能性がある。

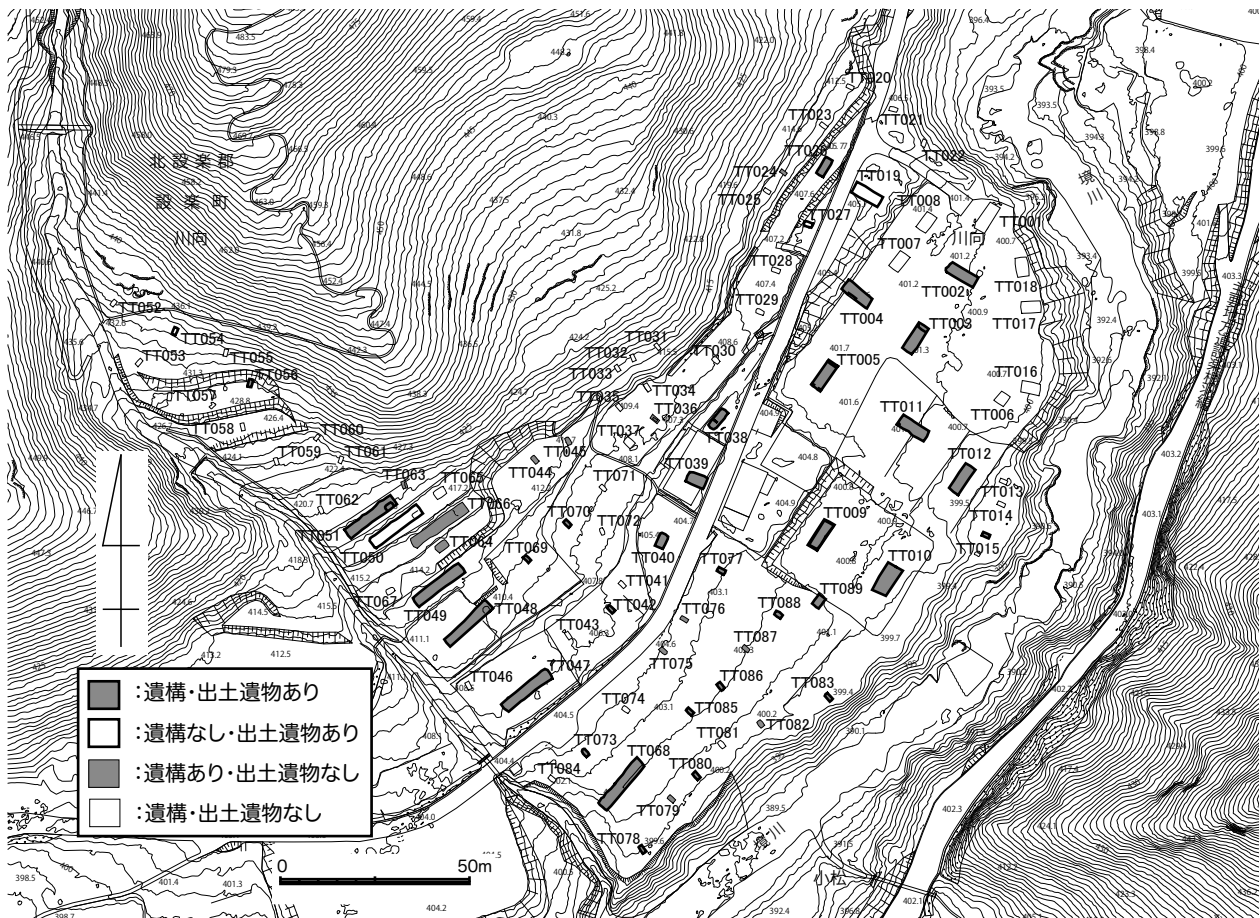
(陰山誠一)



TT040遺構検出状況(東から)



TT068遺構検出状況(北東から)



下延坂遺跡範囲確認調査トレンチ配置図(1:2,000)